

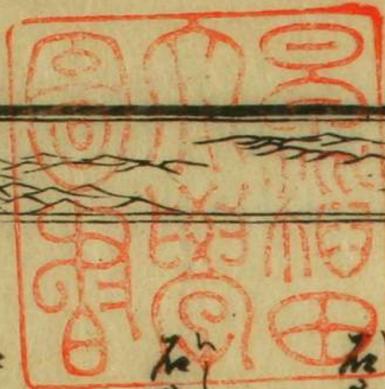


驗本氣の禱  
の

遠  
972  
6



遠門  
號 972  
卷 6



繪本垂山話卷之六

目録

石舟足身赤坂在雨を討詠

日因

石舟兵如英波子いづれ詠

石舟赤坂在深を討くち札を差す因

石舟深七傳中へ對く詠

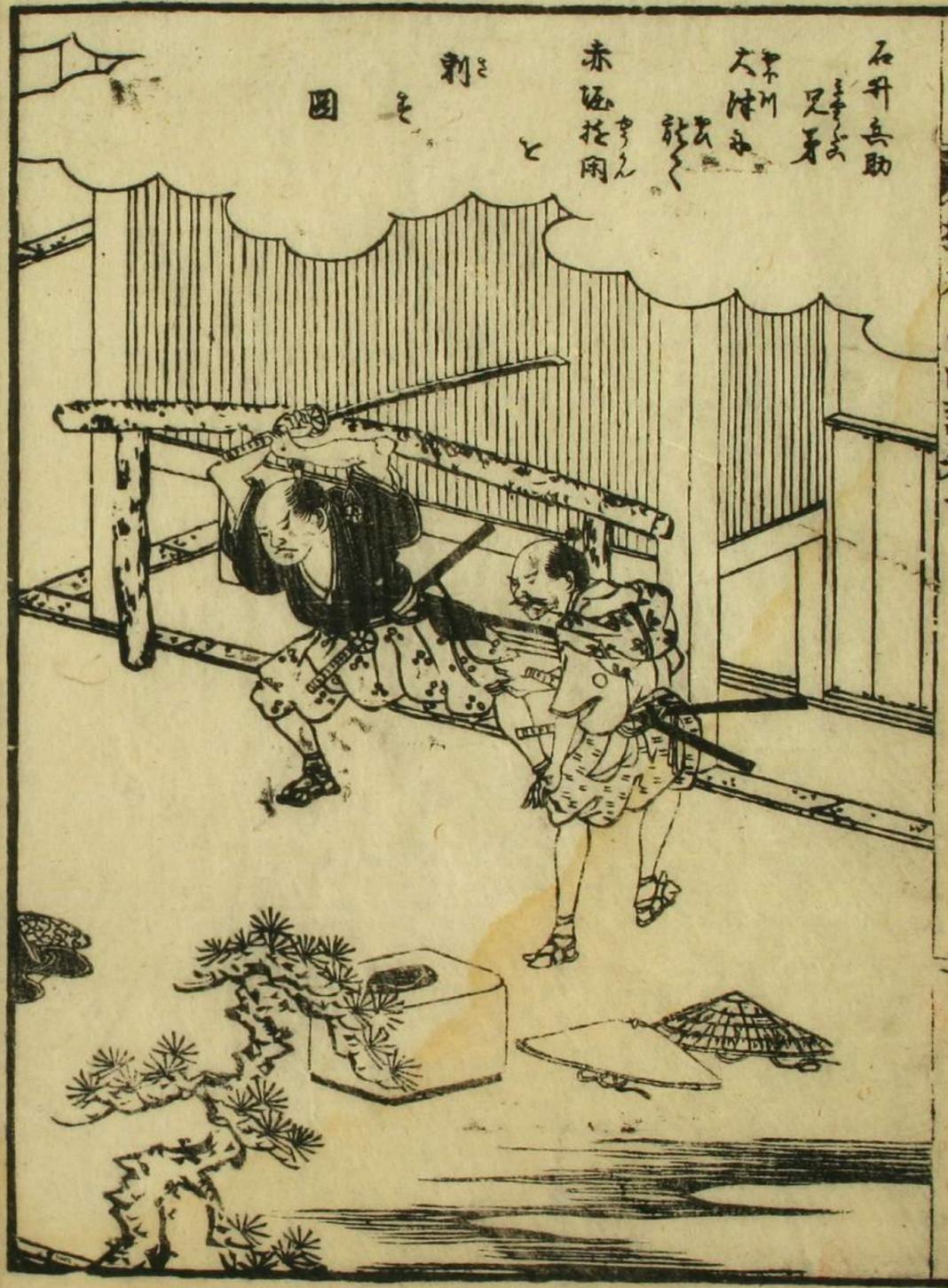
石舟深七免難子と逢ふ詠

石舟深七免風子遭入く和を覆す因



繪本垂山話卷之六





石升兵助  
兄弟  
大伴  
赤坂  
刺  
毛  
圖

繪本  
山  
記  
卷

其ては同くは彼がむも又の仇ありと我くと尋ひ求む一とあり  
とれは渠も思ふ合んと時日と接さすは幸いといふ事むむむむ  
兵助頭とてうけえたる一は其の仇も重し今その子とてあつて  
又とて言さるる不仁のふみありとて時言と信みとてあつて  
ざうしが深七は實果取めて入るをと奇りしく諸國とてざう  
求んと空く年月と経る内暴悪の赤堀又いふあつてとて  
おしとていふをとて申せむとていふとていふとていふとて  
もとていふ素倦とていふとていふとていふとていふとて  
次ありとていふとていふとていふとていふとていふとて  
べとれとていふとていふとていふとていふとていふとて

其方車我入る并兵を尋つて開けりいふと其意と

復せんと年月とていふとていふとていふとていふとて  
返まき車快のむあり候と其方又控糸とていふとていふとて  
ありけとて其方むも又の仇ありとていふとていふとて  
まぐとていふとていふとていふとていふとていふとて

年月

石井兵助

赤堀信を尋つ

かくのどく隠り又いふとていふとていふとていふとて  
ふれは常八控門とていふとていふとていふとていふとて  
の旅客は今も愛むとていふとていふとていふとていふとて  
る中依はるべしといふとていふとていふとていふとて  
まぐとていふとていふとていふとていふとていふとて

前後より丸田に寄りて石井兵右衛門が子石井兵助は源七の  
汝が子侍をまつ思と寄りて我がと付く返りて汝具  
わ清と寄りておのよも有まじ色だんそのま家とす一と  
母は困人母がどられたと名ひがけあたる成国のふ人さ  
返りてその不意の志とる我方へ来りてやうか神祇其が  
不母わらぬとて兵助怒り一臂とては困と後より母侍  
そりてかしも傷せぬ汝いんを幸とも子のわ清あづん  
うに強く色と思はんたてい汝ともゆるはすと責問へは  
困人母怒りたて侍をまつ思とるとも我亦ともはるる  
侍人を其の今も我方へ来りてか兵右衛門の返りて母も  
はるる不我母を此の亦たこと奇怪とて逃たんとする石井源七人

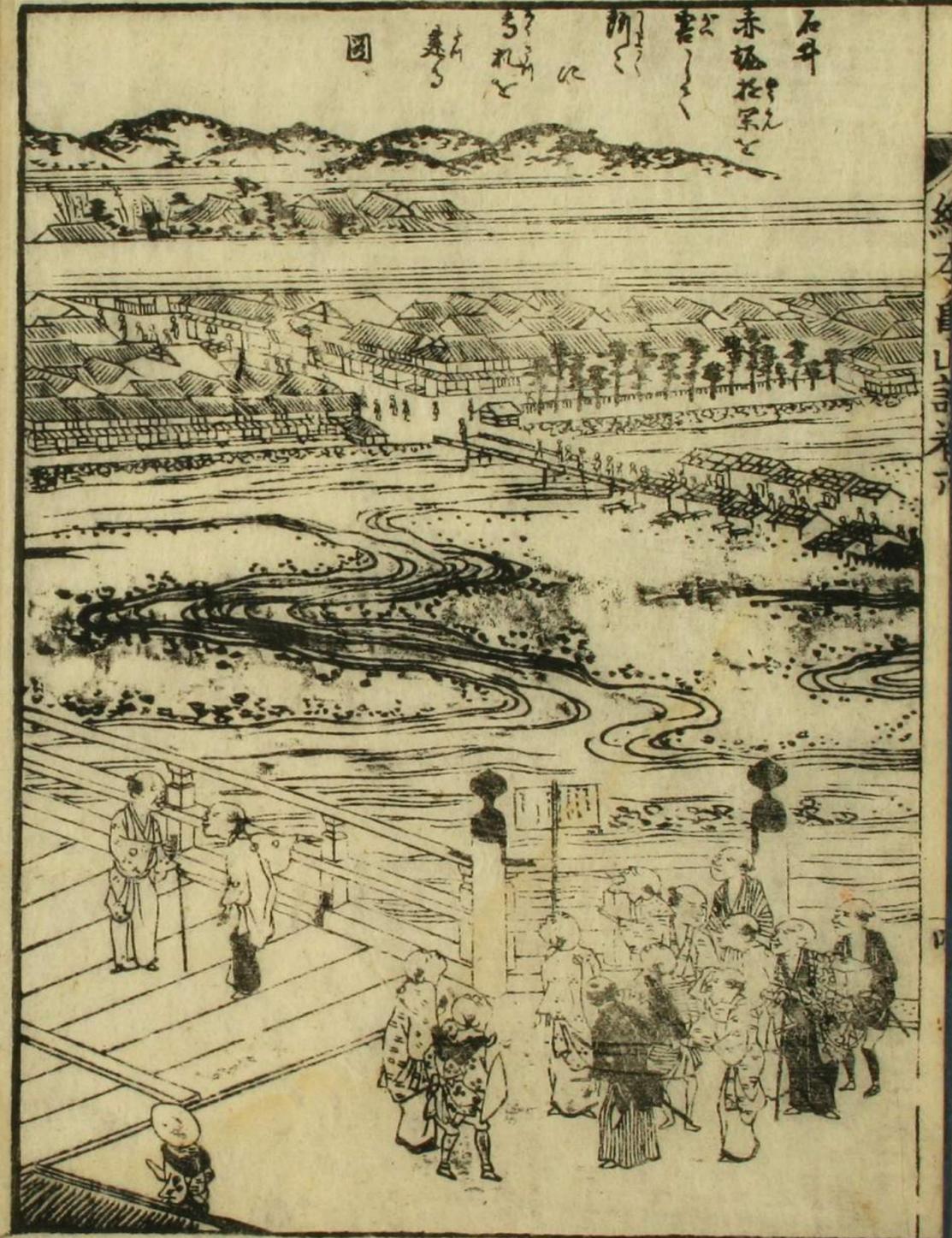
かへりてそのかいてせとるもまうく一カ母首付あはれ一通  
と死骸のうへかたは兵助の侍の返りて源七の被れと赤衣を返  
かへりてその後侍中へりんとてあへく東西へりて入津  
とてと之をせり

石井兵助美濃母の事

石井源七は源七の父源七の母源七の母源七の母源七の母  
武士より一は小系より一は源七の返りて源七の返りて  
と寄りて子孫を其業と守りて母郷里の名家とては中  
い曾五清弱冠より武術と好む暇は餘例の奥秘と得たりは  
其幸國司小園の家系も正したるごとく佩刀を字とて其  
妻は石井兵右衛門の妹ありては源七の返りて兵右衛門は源七の



會  
山  
古  
下



石  
赤  
花  
宗  
と  
新  
丸  
と  
團

新  
丸  
山  
古  
下

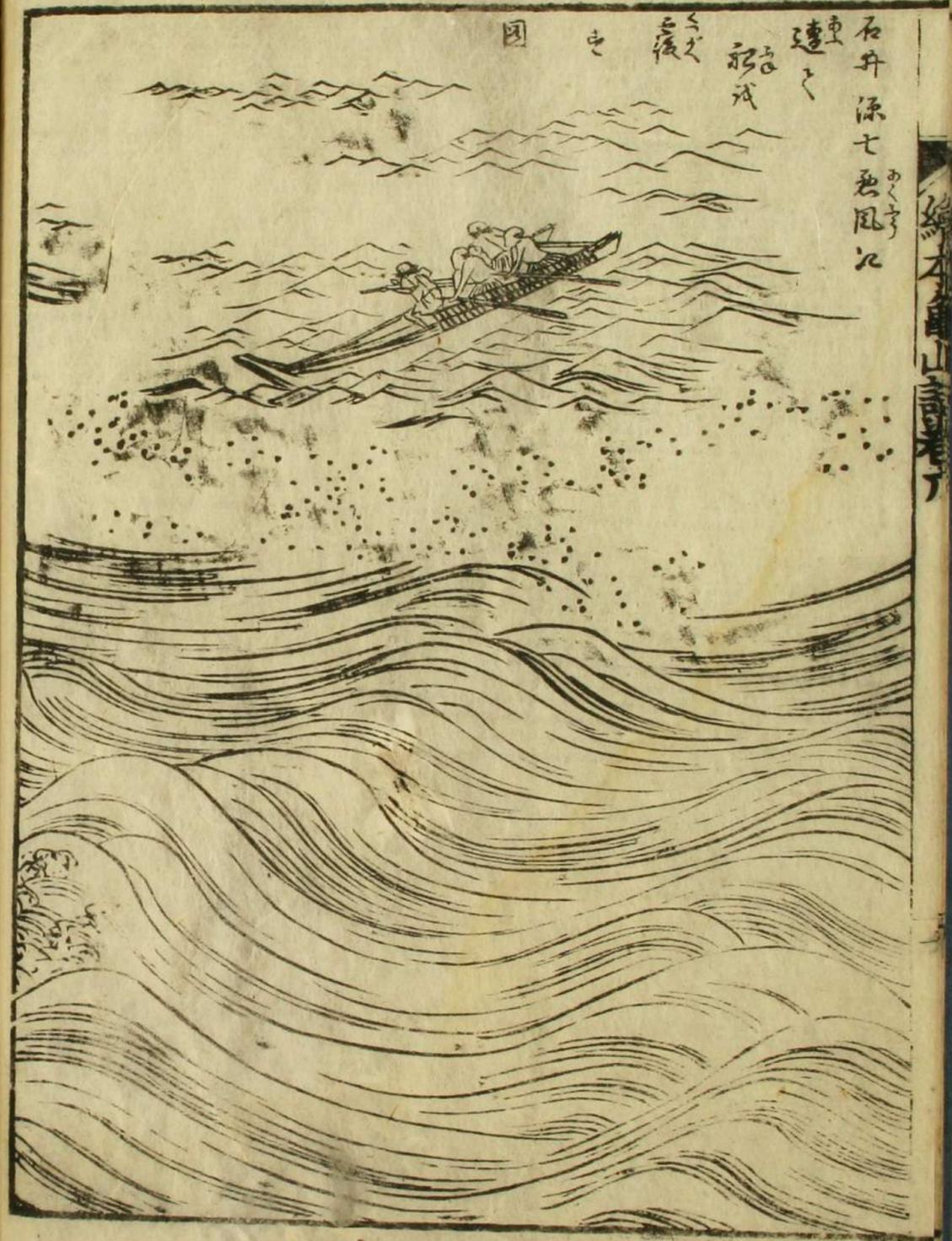
曾兵清も猶老車中及もとも志氣盡術者も妻へ次を并ぶに  
とてくくひくく人取馳りくくはく兵助中まの波あうくくはに  
老母妻へ老中力とて兵を奉つが所持の槍と形目みとてくくは清國中  
あつりくくはひ居回中くくは兵助が使宜とて侍居さうかくて并  
兵助へ赤坂庄園と付くあくは建礼とて中重子の身の常八と從く  
清國彦原村中くくは何が赤中老中兵清人か悦びいさう清志  
なく赤中留くくは老中杖助へ兵を奉つが横死と悔くひそくはさうの  
け間より尋問んとてくくはさうのわくくはさうの足下は地中あう  
くくは故情を奉つとてくくはぬくくはさうのわくくはくくは兵助  
涙と流し候のくくは又兵を奉つ横死の後追國近をいさう及くは  
諸國と通歴くくは補求とてくくは其を所たれど南春徳中即侍

あうくは迹せくくは再び人は母あり彼が又庄園が居候何人母を死  
は旧居の武士ありくくは追隣のそのおごり中ありひそくは寛くや  
くくは見出侍新詮信弱の侍を奉つ我々が寛く人をいさ  
ある清山幽若中も思きくくは出ましたとてあう彼が又庄園と對面國  
若波のきくくは待べきは書記へくくは建礼とてくくはたは家集  
もい事と知くくはひくくは家後と進あるくくは建礼中あわく渠が  
あうんと侍くくは中屋中いと清志は細くくは中野き河と止くくは  
くくは今にいさうくくは君父の仇と侍らくくは運命時勢中より  
て千辛万苦と侍万死一生の厄とてくくは女くくはくくはくくは其  
志くくはさうの拂あり君父の仇め共中とて戴さうの平中より  
役くくはくくは實中入理の自給くくはの面中たれ其居子とる





石舟の急流



石舟の急流  
連く  
詔成  
之  
國

石舟の急流

石舟の急流





狐人考  
作  
比

狐人考  
作  
比



多しは恥頭と声と揚子合のくく見たりと人々のかたどりのやど  
 こそよきけ恥二あり二ありとくく人の怒る若石もあつし恥の碎け  
 恥散ば憐れい恥中のくく横たし若物くくも海中でぞ舟入  
 くるくせと凍七の運や強ううん頼みくく出彼人若も恥より危く  
 も命とぞ助さくくも沖中の若上母れ付くくぐりくくして流  
 わりくく助はあつ若もくく合物とぞ二日か回若上母ありくく漸  
 石も付くく漂と合いむあくくけいお母れ果んての口惜やと恥恥と  
 くく居たりくく又又日くく風波神了漢加金毘羅より下向の恥  
 母救とくく人返り若くくつと踏用金も海中へ沈くくく接初けりき  
 漸くく恥恥母子合い人くく母儘の流用と恵まきく人返と出せ先流  
 房原村た何が洋もくくそ安助もも母事と計んと流明とぞまきく

赤坂傳の石井が流流退り話

禮わくく盗取も相共小悪とあれあわくく軍あつるか赤坂傳  
 へんあつは川付化を流れ我もよりて若合名の山中にのくく是後人跡  
 掃り地あまば憐れあく付化とくくあは上堂の流師もくくふ入く  
 麻袋と頼し今の中くく小を鄙の悪とぞれくく月日とまきく  
 其其本も言て文明二章のまきくつり付化用ありくく永劫(凶  
 びとの比を石井が建礼の呼返るまき付化同捨るんあははと二  
 條の指ありつりてんまき付化と建りつりその文傳とくくく  
 流らつて赤坂地へ人自つくく赤坂もかくと若も二付化を流大  
 母怒りくく兵助と懼まきく逃返り母わはは又年をまきくは方一も  
 兵助も付くく事ありくくそ致くかかくもいふんとくくせ(母こそ



山崎の風景



赤松の  
石井と  
みくら

赤松の風景







赤坂の雲



赤坂の雲

石舟斎七  
寛文

赤坂の雲

十五

赤坂石井源七と付話

安中六相が菩提所稱名寺と云ふ人里と稱する南隅境と距一  
 里野み只つとて寺あり居系村より二十餘町ありも  
 隆より以て文廟二年二月十一日石井源七彼方の河傍みれとてあり  
 て末の下別より居系とて此稱名寺あり用の支平と云ふに及  
 びてくらんとして其日におより去ぬ所志より物淋くまはる傍  
 へ引取酒菓ありて知くれば河みおよりわとに思はれ成の刻  
 みありて桃燈と借く稱名寺とて出征ある南隅境にこそ  
 所く赤坂傳へる雲つら石井が化けせしとて傳化と云ふその  
 由く先と伺はさる相傳く傳化をせしとて石井こそ人里離る寺  
 み入り定くゆりてあり及べしよとてふくとも南隅境にこそ

も掃めしとけみの中あれはとてけんみ屋敷の時ありとて  
 赤坂大み悦ひ多用ありと他國とてしひく宿とて出とて下り居  
 汲み宿りしそのまゝとて合を言ふ南隅境みありとて石井  
 とけき術とありとて河柳の宿みとてしとありゆと今やと傳  
 うけり所とも知はれ源七は南隅境みありとて折る由縁と衝が  
 ぶく川風起るとて面と流せり傘とてけ足とてやめと境の  
 木ありとてみ伴化松陰よりおどり出刀と抜きも見えん源七が提  
 てる桃灯とてことあり南隅境七とていひかきかてらるるも  
 何ものとも知はれ七人ありとて前後と曲と一日み抜連と物とも  
 いと切く着る源七も早足の男らりとも強がばを得たりとて後合を  
 後み宿く傷けとも風面起るとて一人とて奪とてた圍みあれは



繪本山崎屋



ありとらん得うしん伴他が慮思まぶつしよとあたてて骨と物と  
 はぶやましく川いあげあひよる加勢とともふたれは容易い付得が  
 遠と何い彼家母あび入く密あ付んとあまをいよあひよる  
 糸村いよとくや何家の後母続くと較の内ああび何い  
 不飲ありしあてかろきり

繪本龜山詩卷之六終

